石見銀山と大内氏

長谷川博史

はじめに

石見銀山（佐摩銀山・石州銀山）が発見された時、その所在地である石見国邇摩郡は、周防国大内氏の支配下にあった。黎明期の石見銀山が大内氏の影響下にあったことは、よく知られた事実であると言える。ただし、石見銀山と大内氏の具体的な関係性については、実はそれほど明らかとは言えないのが実情ではないかと思われる。その主たる原因は、やはり 16 世紀前半の石見銀山関係史料の著しい制約にあると言わざるをえない(1)。

16 世紀の石見銀山に関する研究史においては、小葉田淳氏の論文「石見銀山―江戸初期にいたる―(2)」の果たした役割がきわめて大きい。今さら言うまでもないことではあるが、小葉田論文は基本情報がほとんど網羅された重厚なもので、今にいたる主要な石見銀山理解の基盤となっている。山根俊久氏による地道な研究の蓄積が、この論文の成り立ちを支えている点も見逃せない。しかし、その小葉田論文でさえも、16 世紀前半に関する叙述は近世後期の諸記録（いわゆる「銀山旧記」等）に大きく依拠している。

たとえば、当該期の石見銀山をめぐって、周防国大内氏・出雲国尼子氏・石見国小笠原氏の三氏による抗争があったことは事実であると思われるが、小葉田論文に「小笠原氏は銀山の領知をかなり長期にわたり果たしえたようである」と記されたような、小笠原氏単独の支配が長期に及んだとするとらえ方の背景には、近世以降の諸記録からの影響が看取される。また近年の研究では、石見銀山の開発に尼子氏の隠然たる影響力を見出そうとするとらえ方もみられる(3)が、それは同時代史料によって裏づけられた仮説とは言えない。

近世以降の諸記録に描かれた石見銀山をめぐる戦国期諸勢力の抗争に関する叙述には、すでに銀が貨幣としてきわめて高い価値を有しているという認識が当時の人々に共有され、銀そのものを奪い合うために戦ったものだという前提認識が伏在しているのではないかと推察される。しかし、16 世紀前半の日本列島において、それはどこまで普遍性のある認識であったと言えるだろうか。

16 世紀前半は、日本列島内部にまだ高い銀需要が生じていない時代である。その意味では、16 世紀後半以降とは全く別の様相を呈していたとも言える。16 世紀後半の世界全体と日本列島における銀をめぐる様相は、それ以前と比べて別世界とも言える劇的な変貌と飛躍的なひろがりを見せていく点が重要である(4)。16 世紀前半の石見銀山を理解するためには、そのことを正確にとらえておく観点が欠かせないと思われる。16 世紀の前半と後半では、列島社会における銀の位置づけが同じであったとは考えられない。また、大内氏・尼子氏・小笠原氏にとって、石見銀山がどのような価値を有していたのかという問題は、後世の理解とは切り離して検討する必要があり、それぞれにとっての石見銀山の意味が同じであったと即断はできない。

さて、石見銀山に関する研究史を振り返ってみると、大内氏との密接な関連性がうかがえるにもかかわらず、大内氏に視点を据えて検討されたことがあったとは言えない(5)。そのため本稿においては、16 世紀前半における石見銀山と日本銀流通の特徴を今一度確認し、とりわけ、当時西日本においてきわめて大きな影響力を有するに至って

いた大内氏の動向が石見銀山や日本銀の流通とどのように関連していたのか、大内氏にとって石見銀山はどのような意味において重要であったのか、日本産銀の流出が大内氏の興亡にどのような影響を与えたのか、銀鉱山の発見が 16 世紀前半西日本の諸勢力に何をもたらしたのか、あらためて検討することを課題としたい。

Ⅰ　初期の石見銀山

（１）史料上の課題

江戸時代に石見銀山の来歴を記した記録は多種多様なものが残されており、「銀山旧記」と総称されている。それらの成立経緯や諸写本の系統については、小林准士氏の研究が重要な手がかりとなる[6]。

諸種の「銀山旧記」のうち最も古い時期に成立したものを写したのは、「石州仁万郡佐摩村銀山之初」（高橋家文書「石州銀山古書物写」所収）[7]ではないかと思われる。それには年代も作者も記載されていないが、ほぼ同文の「おべに孫右衛門ゑんき」（島根県立図書館所蔵謄写本「石見国銀山要集」所収）[8]が、文禄５年（1596）３月 20 日に藤井善右衛門丞に宛てた三島与左衛門覚書の形をとっている。原本は発見されていないが、記載内容からみて、年代表記などの誤記が多い「おべに孫右衛門ゑんき」よりも、「石州仁万郡佐摩村銀山之初」の方が、より先行する原本（もしくは写本）を写したものであると推測される[9]。いずれにせよ、今に残されたこの２つの写本は、その原本が 16 世紀末に成立した覚書であり、何らかの意味でそれをふまえながら大きく変化していったのが、近世の諸種の「銀山旧記」であると考えられてきている。

本稿の関心に即して重要と思われるのは、小林氏が、この２点の写本について「一六世紀段階の歴史的事実を知る史料としては、今後これらをもとにして論じる必要があるであろう」と指摘している点である[10]。これらの写本に記されているのは、他ならぬ 16 世紀前半における石見銀山の歴史である。この時期の著しい史料的制約をふまえ、まず「石州仁万郡佐摩村銀山之初」に基づいてその内容を確認しておきたい（以下では、これら２点の写本を「三島覚書」と略称する[11]）。

三島覚書の要点をまとめれば、おおむね以下のようになる。

- 大永７年（1527）年３月 23 日、出雲国田儀の三島清右衛門が、出雲国杵築の鷺銅山より大工を連れて来て入山した。
- 吉田与三右衛門・吉田藤左衛門・於紅孫右衛門の３名を「山大工」とし、「鉛」（銀鉱石＝鏈〈クサリ〉そのものか、もしくは鏈を精錬した含銀鉛）を採掘したが、後に於紅孫右衛門は殺害されて、大工は２名となった。
- 現地で銀山の管理を担当した「銀山庄主」は、三島清右衛門と、博多の神屋寿禎の代官小田藤右衛門の２名であり、彼らは銀山へ米銭を供給し、銀鉱石を買い取っていた。
- 享禄４年（1531）、小笠原氏が矢瀧城を攻撃し、銀山が破れた。
- 天文２年（1533）年８月、博多の慶寿が来住し、現地での銀製錬が開始された。
- 銀山への課税額は、毎年京銭 100 貫文（銀 100 枚）に定められた。
- 銀山大工両名が周防国山口に赴き、大内義隆の判物下賜を願い出た際に、大内氏家臣の青景（隆著）・吉田若狭守（興種）・飯田石見守（興秀）が取次役となり、大内義隆より、吉田与三右衛門へ大蔵丞、吉田藤左衛門へ采女丞の官途がそれぞれ遣わされた。
- 天文９年（1540）年、尼子氏が銀山を攻撃し、銀山が破れた。その時、吉田采女丞は尼子方に与したため、安芸国郡山合戦の敗北によって没落し、大工は吉田大蔵丞１名のみとなった。
- 吉田大蔵丞の弟の吉田孫左衛門は昆布山谷の土居を受け取り、吉田大蔵丞の妹聟の坂根次郎兵衛は出土谷を受け取り、吉田大蔵丞の母は出土谷の下手にある内田屋敷を受け取った（以上は

吉田采女丞の闕所分と推測される)。この内田という人物は、山口から銀山の検使として派遣され、大工（吉田采女丞か）の妹聟となっていた。

・天文 11 年（1542）8 月 4 日、昆布山谷の洪水により、1300 人以上が流された。同年に大内義隆が出雲国に攻め込んだが、翌年 5 月 5 日に敗軍した。

・天文 13 年（1544）年、吉田大蔵丞が死去し、入聟の正重が跡を嗣いで大工となった。しかし、天文 20 年（1551）陶隆房の挙兵によって大内義隆が自害すると、同年 9 月 18 日に正重は小笠原氏の命により山吹城において切腹させられた。その後は陶氏が任命した房宗が大工を務めた。

この覚書に記された内容は、安芸国郡山合戦における尼子氏の敗北、出雲国からの大内氏の敗走、陶隆房の挙兵など、政治情勢に関わる記述を除けば、同時代史料に残されなかった情報が大半を占めている。その一方で、大内氏家臣の人名表記も正確であるように、同時代史料との明らかな齟齬が見られるわけでもない[12]。16 世紀後半に成立した二次的な史料であることは間違いないものと思われるが、さらに後の時代に成立した諸種の「銀山旧記」とは趣が異なり、伝説的な発見譚なども見受けられず、同時代人の残した記録や見聞の痕跡をうかがわせている。

（２）銀鉱石産出時代の石見銀山（1527～1533 年）

三島覚書によれば、大永 7 年（1527）3 月 23 日に、出雲国田儀の三島清右衛門が、出雲国杵築の鷺銅山より大工を連れて来たのが、石州銀山採鉱の始まりであると記されている。銀山発見後の早い段階から博多の関係者が深く関与した可能性はきわめて高いと推測されるが、当初から博多の神屋寿禎が石見銀山の発見を主導したとみる通説的理解には、後世の記録から影響を受けた誤認があることをうかがわせている。また、石見銀山の再開発が大永 6 年にはじめられたというかつての通説的理解は、「おべに孫右衛門ゑんき」の誤記が後の諸種の記録に反映されて拡散したものである可能性が高い[13]。この後、現地製錬の始まる天文 2 年（1533）に至るまでの 6 年間は、専ら銀鉱石（鏈〈クサリ〉、もしくは鏈を精錬した含銀鉛）が産出された時期であったとみられる。

この頃の石見銀山について、三島覚書には、3 人の「山大工」（吉田与三右衛門・吉田藤左衛門・於紅孫右衛門、ただし 1529 年に於紅孫右衛門が殺害されて大工は 2 名となったという）が採掘を統轄していたこと、「銀山庄主」は三島清右衛門と小田藤右衛門（博多の神屋寿禎の代官）であったこと、この 2 名は産出された銀鉱石を米・銭により買い取っていたこと、などが記されている。

その銀鉱石の一部と思しきものが、採鉱が始まって 1 年もたたない時期の朝鮮王朝の記録に現れる。

〔史料１〕

『中宗実録』巻六十　中宗 23 年 2 月 10 日条

〇壬子。刑曹啓曰、甲士李世孫告訴于中部曰、金仲良・金有光・朱義孫・李守福・安孝孫等各出木緜五百束、作同務、或與倭通事潛貿禁物、或於赴京通事處、黄金三十九兩・銀七十四兩九錢付送。而朴繼孫・王豆・應知・安世良・張世昌等、以倭鉛鐵作銀于黄允光家、至于七八日云。[14]

中宗 23 年（1528）2 月、刑曹（朝鮮王朝の司法機関）から報告があり、李世孫が訴え出たところによれば、金仲良・金有光・朱義孫・李守福・安孝孫らが、それぞれ木綿五百束を出しあって共謀し、あるいは倭通事からひそかに禁制品を購入し、あるいは北京に赴く通事に金や銀を付送したという。そして朴繼孫・王豆・應知・安世良・張世昌らが、7～8 日間にわたり「倭鉛鐵」を用いて銀を作ったらしい。「倭鉛鐵」は、日本から朝鮮半島へひそかにもたらされた含銀鉛と考えられる[15]。当時の日本列島においては、銀製錬技術がし

ばらく廃絶して伝承されていなかったと思われる。そのため、この時期に採掘された銀鉱石の直接の需要は、専ら日本列島の外側に存在したと考えなければならない。

三島覚書に「銀山庄主」と記された2名については、次のようなことを指摘できる。

まず、三島清右衛門については、以下の史料が知られている[16]。

〔史料２〕

毛利元就知行宛行状写（田儀桜井家文書）

今度此筋為発向、大軍引率令当（到）着処、宿等其外人馬・舟手・水府（夫）之儀、入念之段、神妙候、因茲雲州田儀村之内ニ而屋敷一ヶ所・田五貫前宛遣者也、

九月四日　　元就（毛利）　判

三嶋清右衛門尉

〔史料３〕

某袖判家臣連署奉書写（田儀桜井家文書）

御判有之

田儀傳馬役小□儀并舟役、依愁訴、被仰付候、全可有裁判候、為其被成御袖御判候、若於後日緩之儀候者、則可致召放之者也、

十一月一日　　保生（中務太輔）　判

保宣（源内木衆）　判

三嶋清右衛門

〔史料１〕は、永禄5年（1562）と推定される毛利元就の書状であり、三島清右衛門尉は、尼子氏を討つため出雲国へ侵攻した毛利氏の大軍に「宿」「人馬」「舟手」「水府（水夫）」を供出したことがわかる。また、〔史料２〕は、天正年間（1573-1592）に石見・出雲国境一帯に所領を有した富永氏が発給したものと考えられ、三島清右衛門が「田儀伝馬役」「舟役」に関する権益を認可されている。いずれも、三島覚書に記された「三島清右衛門」と同一人物、もしくは同じ家の次の世代の当主であった可能性の高い人物であり、石見・出雲国境地域を中心に、海陸の交通・運輸に大きな役割を果たす存在であったことがわかる[17]。

小田藤右衛門については、三島覚書には博多の豪商神屋寿禎の代官であると記されている。この人物について、秋田洋一郎氏や佐伯弘次氏は、大内氏が派遣した天文16年度遣明船一号船船頭と同一人物とみている[18]。中世の博多は、日本列島における東アジア海域の玄関口として、貿易拠点としての圧倒的な優位性を維持・発展させてきた。前述の中宗23年（1528）に密輸された「倭鉛鐵」が、朝鮮半島へたどり着く過程において、博多の神屋寿禎や小田藤右衛門がその行程の一角に不可欠な役割を果たした可能性は、きわめて高いと考えられる。三島覚書の記述は、銀鉱石が海をわたって搬出される際に、博多が最大の拠点となったことをうかがわせている。

以上のように、この時期の銀鉱石の搬出は、出雲国の三島氏や博多の神屋氏・小田氏のような広域的な商業・運輸・金融を担いうる存在を前提としなければ、成り立つものではなかったと考えられる。その意味でも、「銀山庄主」による全銀鉱石の購入体制は、この時期の石見銀山の実態に即して、最も合理的な仕組みであったと言える。

Ⅱ 銀の流出と海域の変化

（１）日本近海に現れはじめた唐船群

明の鄭舜功は、嘉靖34年（1556）に浙江総督楊宜の使節として日本に派遣され、豊後国大友義鎮に幽閉・軟禁されながらも、嘉靖36年に帰国するまでの間、日本に関する情報を収集し、後年それらを『日本一鑑』[19]としてまとめた。袁茂萍氏は、日本への強い関心を抱いていた鄭舜功が、自身の日本における経験と日本情報の分析にもとづいて描いた日本認識には、一般的な明人とは大きく異なる顕著で独特な客観性が見られることを指摘している[20]。

その鄭舜功が、「後期倭寇」の展開過程を詳細に論じた『日本一鑑　窮河話海 巻之六』「海市」の項において、前史として日本と中国の通商関係

の歴史を概説している。周知のように明朝は海禁政策を採っていたので、私貿易は厳禁されていたが、その状況が日本列島を巻き込む形で変化していく転機として、次のようなエピソードを記している。

〔史料４〕

『日本一鑑　窮河話海 巻之六』「海市」

嘉靖甲午(1534)、給事中陳出使琉球、例由福建津発、比従役人皆閩人也、既至琉球、必候汎風乃旋、比日本僧師学琉球、我従役人聞比僧言日本可市、故従役者即以貨財市之、得獲大利而帰致使、聞人往々私市其間矣、後有私市平戸島、島夷利貨、即殺閩商、未幾天乃雨血其地、地復出血、島夷倶災遭、殺諸商、皆見夢於島主、島主寝疾、立廟祀之、其島始安、自後私商至彼、待以殊禮、繕舟匱乏、島夷称貸、故私商衆、福亂始漸矣、

琉球国王尚真は、嘉靖 5 年 12 月（ユリウス暦 1527 年 1 月）に薨じ、五男の尚清が跡を継いだ。『使琉球録』[21]によれば、尚清の国王としての地位を承認するための冊封使（正使は給事中の陳侃）が明朝から派遣され、福建省を出港して那覇港に着いたのは、嘉靖 13 年（1534）5 月のことである。先例に従い、福建省の人々（閩人）が従者として随従した。那覇の天使館における滞在は、9 月までの 3 ヶ月以上に及んでいる。

鄭舜功の記述によれば、その滞在期間中に、従者の福建人たちが、日本の留学僧から日本商人との交易を勧められ、大利を得て帰国し、その話を聞いた福建商人たちが次々と平戸島など日本へ商売をしに行くようになったこと、おそらくは取引上の紛争から福建商人が殺害されたことを契機として、島主（平戸松浦氏）が福建商人を鄭重に遇する政策をとったため、平戸における交易はさらに栄えたこと、そのことが、福建省における倭寇の活動（「福乱」）が始まる要因となったこと、などを述べている。

これはもちろん鄭舜功の認識であるが、彼自身は、この出来事こそが東アジア海域における「後期倭寇」顕現の契機であったと、とらえていたことがわかる。『使琉球録』によれば、これと同じ時、琉球国王尚清は、陳侃やその従者たちに、日本人の動向に強い警戒感を表明したと記されている。当時の琉球において、日本商人が新たな活動を展開しはじめていたことは、事実と考えられる。

さらに、1540 年代に入ると、博多や平戸以外の九州周辺の諸港湾にも、中国のジャンク船（唐船・明船）が次々と来航するようになる。田中健夫氏の研究[22]などによりながらそれらを概観すると、表１のような事例が知られている。

表１　明船（唐船・ジャンク船）の来航記事事例（16世紀前半）

1539年	周防国に「明船」来着（『続本朝通鑑』）
1540年	種子島竹崎浦に「唐船」漂来（『種子島家譜』）
1541年	豊後府内の外港神宮寺浦に「明人」281人が来着（『豊薩軍記』）
1542年	肥前国平戸へ「明船」入港（『新豊寺年代記』）
	那覇に福建省漳州の陳貴と広東省潮州府潮陽県の船が来航（『明実録』）
	アントニオ・ダ・モタら4名がジャンク船に乗り込み漂着（『世界発見記』）
1543年	豊後国に「明船」6艘が着津（『豊薩軍記』）
	日向国の浦々に18艘の「唐船」が着津（『日向記』）
	王直の船が種子島に漂着（「鉄炮記」）
1544年	薩摩国阿久根に「唐舟」来着（『八代日記』）
1544～1547年	朝鮮半島西南岸に多数の「荒唐船」が出没（『中宗実録』『明宗実録』）
1545年	肥後国天草の大矢野に「唐舟」来着（『八代日記』）
	豊後国府内にポルトガル人を乗せたジャンク船来着（「イエズス会日本報告書」）
1547年	日本で貿易をして朝鮮に漂着した福建人342人を明に送還（『明世宗実録』）
	大坂本願寺に「明船」来着（『天文日記』）
1549年	伊勢国に「明船」来着（『松木氏年代記』）
	鹿児島にフランシスコ・ザビエルが来着

二次的な史料が含まれるとはいえ、1540 年代以降に顕著な特徴であり、おそらくは記録に現れないような事例が数多く存在した可能性が高い。彼らは明朝が禁じた密貿易商人たちであり、「倭寇」と位置づけられた存在でもあった。鉄炮伝来もキリスト教伝来も、密貿易海商たちのジャンク船によってもたらされたものである。

（２）海域における日本銀の広がり

三島覚書には、天文 2 年（1533）8 月、博多の慶寿が石見銀山において銀製錬を開始したと記されている。

それ以前から、すでに石見銀山の銀鉱石が朝鮮半島へ流れ込んでいったことは、〔史料１〕から見て明らかであると言える。しかし、現地製錬の開始は、日本列島から流れ出す銀の流れの規模を、

大きく変化させていったのではないかと思われる。

そもそも、朝鮮半島にもたらされる銀の量が急速に増加したことについては、中宗 33 年（1538）に、少弐氏名義の使節が綿布を得るため 375 斤（約 225 kg）もの銀を持参したこと（『中宗実録』巻第八十八　中宗 33 年 10 月 29 日条[23]）や、中宗 37 年（1542）に博多聖福寺安心を使者とする偽日本国王使が 8 万両（約 3t）もの銀を持ち込んだこと（『中宗実録』巻第九十八　中宗 37 年 4 月 20 日条[24]）などが、よく知られている。

しかし、石見銀山の現地における銀精錬の開始が東アジアに及ぼした影響は、それよりさらに大きな広がりを見せていったと考えられる。前節で確認したような 1540 年代に顕在化する日本列島西部近海における新たな動きについて、他ならぬ日本銀が日本へ引き寄せた中国民間船こそが「後期倭寇」の母胎であると考えられはじめているからである[25]。そのことを具体的にうかがわせる事例の一つが、1540～1550 年代の朝鮮王朝側の記録に現れる「荒唐船」の問題である。

高橋公明氏は、朝鮮半島西岸・南岸に次々と現れた「荒唐船」（正体不明の船）について、『朝鮮王朝実録』に見られる全 19 事例を紹介し、それらの出現は、1544～1547 年の第一波、1552～1554 年の第二波という、二つの波があり、第一波の多くは中国南部の沿岸地域から日本での交易に向かうジャンク船であったこと、第二波では「倭船」と表記されるようになり、乗組員も中国人より倭人の比率が高くなること、などを指摘している[26]。

たとえば、中宗 39 年（1544）6 月 22 日、「荒唐大船」が朝鮮半島西岸に現れ、出動した馬梁僉使の攻撃を受けて退散した（『中宗実録』巻第百三　中宗 39 年（1544）6 月 24 日条[27]）。その時、取り残されて捕らえられた李王乞は、福建省から来たと証言し、銀を入手して貿易を行うため日本へ向かっていた（「又問因何事到来、則答曰、以貿銀事、往日本」）と供述している。

また、明宗 9 年（1554）6 月 8 日の済州牧使と全羅右水使の報告によれば、5 月 22 日、「荒唐一船」「倭船一隻」「後来船二隻」の計 4 隻の船が、それぞれ朝鮮近海へ接近・碇泊し、翌朝の朝鮮側からの示威行動によって東方へ去った。ところが、25 日、「飛陽島」において「黒衣人四・五名」が呼び喚いているとの情報があったので、軍船 4 隻で挟撃し、難破して上陸した「倭人七名」を捕縛した。また、難破船の板につかまって浮いていた「倭人二十三名、唐人二名」を拘束した。このような賊船は他にも絶えず、全羅道の「甫吉島」にも「倭船一隻」が現れた。

この時、生け捕りにされた倭人らの供述は、以下のようなものであった。

〔史料５〕

『明宗実録』巻十六　明宗 9 年 6 月 8 日条

倭人絲二老等供稱、日本銅興居人與唐人蔡四官等、以買賣大明事、同博多州人・銅興人・平戸島人到章州府買賣、還鄉時船敗、銅興人平田大蔵等二十人、博多州時世老及蔡四官等、杖執三板、浮流登岸云云。倭人千六等供稱、日本平居（平戸）島人、齎持銀兩、買賣湖州地、回還船敗、唐人蔡四官等、則回還時、誤以爲博多州敗船倭人、捉載而來云云。[28]

訊問を受けた「倭人絲二老」等は、「博多州人・銅興人・平戸島人」と「唐人蔡四官」等が明国での商売のため、章州（福建省漳州）から日本へ向かう途中で難破し、「平田大蔵等二十人、博多州時世老及蔡四官等」が漂流して上陸した、と供述している。また、「倭人千六」等は、平戸島人が用意した銀を浙江省の湖州へ持ち込んで売買した後、帰路に難破し、「唐人蔡四官」等は、博多の倭人と誤認されて連行された、と供述している。

いずれも、中国大陸と九州を往き来する航海中に期せずして朝鮮半島近海へ吹き寄せられた船舶群であり、中国（とりわけ漳州など福建省）の密貿易海商や、博多・平戸の日本商人たちによる、頻繁で広域的な貿易活動を具体的に裏づける出

来事であると考えられる。そして、これらの人々を密接に結びつけていた媒介財こそが、「銀」であったことをうかがわせている[29]。

「荒唐船」と日本銀との関係を具体的に指摘したものとして、関周一氏の論文は重要と考えられる[30]。関氏は、第一波の「荒唐船」は、福建の人々が主たる構成員であり、黒色の衣服を着用していたポルトガル人も含まれていて、彼らは銀を求めて日本に向かったと述べている。また、第二波の「荒唐船」については、博多・平戸などの倭人と唐人とが連携して、漳州や湖州において貿易し、銀を中国に持ち込んでいたと述べている。「荒唐船」が日本銀の流通と切り離して理解することのできない存在であったことを、明確に指摘したものであると考えられる。

前述のように『日本一鑑』を著した鄭舜功は、嘉靖 13 年（1534）に、琉球王国の那覇に滞在していた冊封使従者の福建人たちが、日本商人との交易で大利を得て帰国し、これを聞いた福建人たちが密貿易を行うため次々と日本へ赴くようになったことが、「倭寇」の活発化を促した大きな転機であったと認識していたことがうかがえる。本多博之氏は、この鄭舜功による叙述と、中宗 39 年（1544）の「荒唐船」が福建人が銀貿易のために日本に向かう福建人の乗る船であったことを結びつけてとらえ、「後の福建商人の活発な日本進出は、石見銀山で銀が増産され始めた頃からその兆しがあったと言える。」と指摘している[31]。

それにしても何故、1534 年という時期になって、突如として、福建商人が日本との交易で大利を得ることができるというような新たな状況が出現したのだろうか。その要因を特定することは現時点では困難であるが、その有力な候補として、天文 2 年（1533）の石見銀山において現地製錬が開始されたことを見落とすことはできないと考えられる。

石見銀山における現地製錬の開始は、日本列島周辺の銀のみならずさまざまな交流・流通の様相を大きく変化させていった可能性がある。この時代の歴史はそのような観点を念頭に置きながら理解していく必要があるのではないだろうか。

Ⅲ　東アジア国際秩序の動揺と大内氏

本稿の主要な目的は、以上のような初期日本銀をめぐる東アジア海域の新たな状況をふまえて、石見銀山と周防国大内氏との関係を検討することにある。そのため、次に、東アジア世界との関わりを中心として、15〜16 世紀の大内氏の動向を振り返っておきたい[32]。

明朝や朝鮮王朝が成立する以前から、大内氏はすでに大陸と深く結びついていたと推測される。『太平記』には、大内弘世が貞治 5 年（1366）に上洛した際、「数万貫の銭貨」「新渡の唐物」を大量に持参したと記されており、大内氏が大陸由来の文物・財宝を入手し豊かな財力を有していると見られていたことをうかがえる。

1368 年に成立した明王朝は、「海禁」政策により、周辺諸国に対して冊封にもとづく朝貢貿易を求めた。足利義満によって開始された日明貿易は、日本が正式な冊封関係に入ったことを意味した。しかし明代中期以降、密貿易の拡大によって海禁政策は次第に揺らぎはじめた。大内氏が日明貿易に初めて参入した宝徳度遣明船派遣事業（1451〜53 年）は、そのような時代にさしかかった時期に当たっている。

これと同じ頃、朝鮮通交も「偽使」の横行という、難解な事態に直面していった。1453 年に大内氏が朝鮮王朝から通信符右符（毛利博物館所蔵）を賜与されたのもそのような時期に当たっており、他の通交者とは異なる格別な位置づけを与えられている。

明応 2 年（1493）、足利義材が将軍の地位を追われた明応の政変によって、事実上将軍家が 2 つに分裂し、とりわけ明応 8 年に大内義興が足利義尹（足利義材から改名）を山口にかくまったことにより、西日本の広い範囲において、将軍足利義澄と足利義尹のどちらにくみするのかをめぐり、各勢力の分裂・抗争が激化した。大内義興は、永

正 5 年（1508）に足利義尹を擁して上洛し、永正 15 年に帰国するまで、将軍に復帰した義尹（後に足利義稙と改名）を支えて在京し、畿内政権に大きな役割を果たした。その間には、永正度遣明船事業（1509～1513）において細川氏とともに中心的な役割を果たした。

大内義興在京中に顕在化した中国地方における分裂的状況は、1520 年代には安芸国における安芸武田氏・出雲尼子氏と大内氏・山名氏・大友氏との激しい攻防戦へ展開した。尼子経久が安芸国・石見国へ侵攻し、安芸国鏡山城を攻略した大永 3 年（1523）には、反大内方の勢力が一時的に急拡大したが、大永 5 年以降は大内方が優勢な情勢となった。しかし、大永 8 年（1528）、大内氏は安芸国など分国東側の戦線から全面的に陣を撤し、九州における戦争に専念していくようになった。この間の大内氏は、大永度遣明船派遣をめぐって細川氏と対立し、嘉靖 2 年（1523）に渡航した大内船が寧波の乱を引き起こした。以後、明朝は大内氏（および日本の遣明船）に対する深い不信感を抱くようになっていく。対明関係の改善が、大内氏にとって大きな課題となった時期であり、大永 7 年（1527）には大内義興が、新琉球国王の尚清へそのための支援を要請している。またその頃から、北部九州において少弐氏およびその支持勢力との間で、緊迫した情勢がみられはじめた。

そのことを背景として、天文元年（1532）～天文 4 年、大内義隆・菊池義武と大友義鑑・少弐資元は、九州の諸勢力を巻き込んだ全面戦争を展開した。大内氏と大友氏は和睦する形で鉾をおさめたが、大内氏と少弐氏の戦争はその後も継続された。大内氏は、博多を含む筑前国をより確実に把握することを目指していたと考えられる。また大内氏は、15 世紀後半以来一貫して、平戸松浦氏を強く支援して良好な関係を維持し続けていた。

大友氏との和睦を経た後、大内義隆は朝廷からかねて念願の大宰大弐に任ぜられ、大宰府のある筑前国支配の正当性について、少弐氏（大宰少弐武藤氏）を上回る論拠を得ようとしている。また、大内氏は天文八年度遣明船（1539～1541 年）の派遣を実現させ、さらに天文 11 年（1542）には、九州南方海域・琉球へ兵船を派遣し、琉球王国に対して圧力をかける動きを示すまでに至っている。

ただし、天文年間前半（1532～1540 年頃）に大内義隆が九州における戦争に傾注している間隙を衝くような形勢で、尼子氏が中国地方東部へ大きく拡大し、反大内方諸勢力と連携する新たな情勢が生まれた。このことに対応するため、大内義隆は天文 9 年（1540）に安芸国へ向けて出陣し、天文 10 年の郡山合戦において尼子氏が敗走すると、天文 11 年には出雲国へ遠征し、尼子氏の本拠富田城を攻撃した。しかし、天文 12 年 5 月に敗走し、大きな打撃を受けた。

大内氏は、その後も尼子氏をはじめとする反大内方諸勢力との戦争を継続しながら、天文十六年度遣明船（1547～1550 年）派遣を実現させている。また、朝鮮通交において「偽使」が常態化していった時期に、大内氏は最後まで「真史」を派遣することのできた例外的存在であった。大内義隆の官歴は、天文 14 年には従三位となって将軍足利義晴を越え、天文 17 年には従仁位に達した。いずれも当時の大内氏が、東アジアの旧来の外交儀礼や、日本の朝廷権威を、いかに重視していたのかをよく示している。

天文 20 年、陶隆房の挙兵により、大内義隆は自害した。陶隆房はやがて名を晴賢に改めて、豊後国大友義鎮の弟（のちの大内義長）を大内氏当主として迎えた。しかし、天文 23 年に安芸国毛利氏が反大内方として挙兵し、弘治元年（1555）の厳島合戦で陶晴賢が敗死すると、毛利氏の攻勢に追い詰められて、弘治 3 年 4 月、ついに大内氏は滅亡した。最末期の大内氏は、大内義隆の時代の課題を克服しようと新たな政策も試みるが、義隆の死去からわずか 5 年半という短期間で滅亡したことになる。

以上のように、15 世紀後半以降の大内氏は、崩れつつある旧来の外交秩序（冊封体制や朝鮮通交）

に深く参入し、16 世紀前半の大内義興・義隆の時代には、現実の交流・物流の実態にも対応しうる希有な存在として、代替困難な特異な立場を確立し、西日本各地・東アジア海域への影響力の大きさという観点からみて、まさに最盛期をむかえた。大内氏の最盛期であり終末期にもあたる 16 世紀前半は、大内氏と大陸・西日本各地との関係が、きわめて濃密に独特な形で展開した時代であったことがわかる。

さて、16 世紀前半の大内氏の動向にはいくつかの転換点が見られるが、なかでも大永 8 年（1528）～享禄 2 年（1529）頃（大内義隆が家督を継承した前後の時期に相当する）を境に、分国東側の混乱の解消から手を引き、北部九州のより確実な掌握へ向けた軍事的圧力の強化に専念する方向へと、大きく方針転換したことが注目される。とりわけ、天文 8 年（1539）までの大内義隆は、中国地方東部で活発な軍事行動を展開していた尼子氏との戦争を回避し続けた。

大内氏は、なぜこの時期にそのような判断を下す必要があったのだろうか。以下では、大内氏が安芸国から撤兵する 1 年前に発見された石見銀山、およびその後の日本銀流通の拡大を、大内氏の視点からとらえなおすことにより、あらためて石見銀山と大内氏の関係について検討したい。

Ⅳ　大内氏の石見銀山支配

（1）石見国と博多と大内氏

石見銀山は博多との深いつながりのなかで開発されたが、それは大内氏の手でなければ把握しえないことであったとも言える。石見国邇摩郡と筑前国博多の両方を支配した権力は、長い歴史を通覧しても、この時期の大内氏以外には存在しないからである。

石見銀山が発見されたと思われる大永 7 年（1527）当時の石見国守護は、大内氏であった。石見国は、貞治 5 年（1366）に大内弘世が守護に任じられて以降、14 世紀末に至るまで一時期を除き大内氏が守護の地位にあった。その後の石見国は山名氏分国となり、大内氏が石見国守護職に復したのは永正 14 年（1517）のことであるが、その間においても邇摩郡については一貫して大内氏が分郡支配した。発見された石見銀山が所在した邇摩郡は、当時すでに 160 年以上もの長きにわたって大内氏が支配を継続してきた地域であった。

また、大内氏は永享元年（1429）頃から筑前国支配へ関わりはじめ、やがて筑前国守護職を獲得し、永享 9 年からは博多を支配下に置いた。そして、家臣の飯田氏（秀家・弘秀・興秀）を代々博多代官に任じ、現地には下代官として山鹿氏を配置して、博多の掌握に努めた[33]。

今のところ同時代史料によって確かめることはできないが、邇摩郡を治める大内氏が石見銀山発見の当初からそれを関知し関与していたことはやはり疑いのないところと思われる。同時に、博多の神屋寿禎が石見銀山の管理・開発に深く関わっていった背景に、大内氏の指示・委任・支援等が何も存在していなかったとは、考えがたい。

（2）三島覚書からみた銀山支配

三島覚書において特に注目されるのは、天文 2 年（1533）以降の大内氏による石見銀山支配の枠組みをうかがわせている点にある。2 名の銀山大工が周防国山口に参上し、大内義隆の御判により官途を遣わされた際に、義隆への「取次」を担当したのは、大内氏家臣の青景隆著・吉田興種・飯田興秀の 3 名であったこと、「銀山御公用」として毎年「京銭百貫文」＝「銀ニシテ百枚」を大内氏へ納入したこと、大内氏に派遣されて現地に居住した「検使」は銀山大工の妹婿となり、婚姻関係を通して大内氏と現地を結び付ける役割を果たしていたらしいこと、などである。

全体を通して、大内義隆時代の銀山支配が、守護代や現地の国衆を介する形を意図していなかったこと、大内氏家督（義隆）による直轄支配であったことをうかがわせる記述となっている。特に、「取次」を担当したと記されている飯田氏が、代々博多代官を務めてきた家であったことは重

要である。

大内氏が、単に直接的財源として銀山を重視していたわけではないように思われる点にも、留意が必要である。毎年納めさせたという銀 100 枚（＝4 貫 300 匁＝約 16kg）は、永禄 5 年（1562）～文禄年間（1592-96）に毎年銀 5000 枚を徴収した毛利氏[34]に比して、格段に少ないと言える。まして、その 100 枚が京銭 100 貫文の価値しかないとする三島覚書の記述が事実であるならば、銀の価額自体が未だきわめて低い時期であったということになる。二次的史料に記された数値をどこまで信じてよいのか判断できないが、日本列島内部における銀需要の規模が限定的であったことの反映であるとみても、的はずれとまでは言えないと思われる。

大内氏にとって、石見銀山を把握することは、東アジアの国際秩序や海域の変化に対応し、それらに対する影響力を保持していくために重要であったと推測され、それはまた、博多や平戸が所在する北部九州をあわせて統制下に置かなければ成り立たないものであったと推測される。1530 年代の大内義隆が、少弐氏・大友氏との戦争に全力を傾注し、かたや分国東側における戦争を極力回避し続けたのは、そのためでもあったと考えられる。

博多の所在する筑前国は、鎌倉時代以来、15 世紀初頭に至るまでの多くの時期に、少弐氏が守護の地位にあり、応仁･文明の乱の時期には一時大内氏から筑前国を奪回している。16 世紀には大内氏が優勢となったが、大内氏と少弐氏の戦いは大内氏の滅亡に至るまで断続的に繰り返された。少弐氏は、大内氏の筑前国支配を脅かす存在であった。また大友氏は、大内氏の博多支配がはじまるはるか以前の元弘 3 年（1333）から、博多息浜を支配していた。

大内氏は、平戸松浦氏との関係をとりわけ重視した。それは少弐氏への対抗軸として重要であっただけでなく、東アジア海域における平戸の重要性を深く認識していたためでもあると考えられる。大永 6 年（1526）および天文 3 年（1534）～天文 4 年、松浦隆信の家臣籠手田定経は、博多代官でもあった大内氏家臣飯田興秀に何度も武家故実の伝授を求めた[35]。このような日常的な交流は、大内氏・松浦氏の紐帯を具体的に確認し合う場でもあったと推測される。フランシスコ・ザビエルが、平戸を経て山口に来たことも、同様な背景にもとづくものと思われる。

代々大内氏の博多代官を務めた飯田氏が、三島覚書において銀山大工の取次役を務めたとされていることは、大内義隆の意図を強く反映した施策であった可能性をうかがわせている。

（３）銀鉱山開発と銀流通の統制

大内氏時代の石見銀山に関する史料が、極端に少ない理由はどこにあると考えられるだろうか。もともと鉱石の採掘や加工・流通は文書による権利保障が困難であり、また重要な鉱山について慎重な管理・秘匿が図られるのは珍しいことではないとも言える。しかし、16 世紀後半の石見銀山は、西欧の日本地図や明の日本研究書にまで所在を記され、日本列島各地や海外から膨大な数の人々が殺到・来住した。16 世紀前半における史料の残存状況には、おそらく大内氏の意図が介在していたのではないかと推測される。

天文 11 年（1542）に発見されたと伝わる生野銀山も、残された史料がきわめて少ない。「銀山旧記」（朝来市教育委員会所蔵）によれば、生野銀山の開発は但馬国守護山名祐豊が主導し、石見銀山の技術を導入してはじめられたという伝承が残されている。当時の山名祐豊は、郡山合戦に敗北した尼子晴久を次第に追い詰めていこうとした大内義隆と、同じ陣営に属していた。生野銀山の開発に、大内氏が何らの関わりも持たなかったとは考えられない。

また天文 14 年（1545）に、相良氏支配下の肥後国球磨郡宮原において「銀石」が発見されたが、その「銀石」について、大内義隆を介して勅使として肥後国に下向していた小槻伊治は、大内氏・

相良氏の関係者以外には、その存在を「隠密」にすべき事柄と認識していたことがわかる。天文 14 年 12 月 15 日と推定されている小槻伊治書状[36]に、「又銀子事、可為御隠密候、於山口、案内者相見之、可然候由申候者、石州至銀子山申付之、不日可下申候、幸奥山被官人銀山大工所預置候、御知行ノ分クサリ於有之者、天下無双之奇妙候、此事伊治馳走申候共、可為御隠密候」と述べられているからである。小槻伊治は、銀のことは隠密にするよう求め、山口において周旋しておいたので、間もなく石見銀山から鑑定者がやってくるだろうと述べている。翌年 7 月 1 日、石見銀山から派遣された銀製錬技術者「桐雲」が銀の製錬を開始し、同 18 日に 25 匁の銀を吹き出した[37]。同じ人物と思われる「大工洞雲」は、その銀鉱石を実見して、「但州石（生野銀山の銀鉱石）よりも良質だ」と述べたという[38]。この一連の動きを、大内義隆が全く関知していなかったとは考えられない。

生野銀山の開発や宮原「銀石」の鑑定には、石見銀山の関係者が携わったとされており、大内氏の関与が色濃く想定される。この時期の銀鉱山開発が大内氏とのつながりのなかで展開されようとしていたこと、それらの情報の秘匿が図られていたことを、示している。

ところで、大内氏時代の銀の流れは、海外から見て、少なくとも明示的には石見銀山を起点としているように見えないところに特徴がある。銀を積み出す列島側の拠点は、平戸・博多を中心に認識され、それに準じて九州各地の諸港湾も中国ジャンク船「唐船」群の目指すところとなっていった。大内氏にとって、北部九州の確実な確保は、銀の流通そのものを管轄・管理するためでもあったのではないかと思われる。

後世の記録（「銀山旧記」）に初期の銀積出港と記されている鞆ヶ浦（大田市馬路町）や古龍（大田市温泉津町）は、銀の搬出が「隠密」に行われたことをよくうかがわせる入江である。考古学の知見によれば、古龍への経路にあたる湯里（大田市温泉津町）から出土する大内式土師器は、この場所が大内氏中枢に近かった可能性を示しており、銀山古龍ルートは大内氏時代の銀の搬出路とみてよいと指摘されている[39]。経路の地形や銀山からの距離を考えても、きわめて妥当な見方であるように思われる。このようなことも、今のところ同時代の文献史料では確認できていない。これも、16 世紀後半の毛利氏支配下において石見銀山の港として広く知られた温泉津とは、明確に異なっている。

〔史料４〕にみられる鄭舜功の認識によれば、嘉靖 13 年（1534）を起点とする福建商人の日本における貿易活動は、その主要な渡航先が肥前国平戸であったという。平戸が要衝であることは言うまでもないが、なぜ博多や他の九州の要港ではなく平戸であるのか。そのことを、明確に示す史料が残されているわけではない。しかし、天文 3 年（1534）当時の大内氏は、少弐氏・大友氏との全面戦争の渦中にあり、博多は争奪の焦点でもあった。一方の平戸は、長年にわたり大内氏と良好な関係を維持してきた平戸松浦氏が本拠として確保していた。銀を求める中国密貿易海商を他ならぬ平戸に誘引していることは、大内氏の意図の存在をうかがわせる事実ではないかと思われる。平戸は、ある意味において、大内氏が管理しようとした日本銀の積出港という側面を有した可能性があると言える[40]。

三島覚書によれば、石見銀山は、享禄 4 年（1531）に小笠原氏の攻撃により、また天文 9 年には尼子氏に攻められて、「破」れたと記されている。短期間とはいえ、大内氏による石見銀山支配が大きな打撃や制約を受けた時期があったことは事実と考えられる。しかし 1530～1540 年代の東アジア海域における銀の流れを見るかぎり、仮に石見銀山とその周辺を軍事的に制圧したとしても、博多や平戸との紐帯をもあわせて継承・掌握しなければその維持は困難であり、支配する意味も限定的であったと言わざるをえない[41]。16 世紀前半の石見銀山は、大内氏の存在を前提としなければ理

解できないものであったと言わなければならない。

大内氏が、銀の生産と北部九州に至るまでの銀の流通を独占的に管理しようとした形跡が濃厚であることは、16 世紀前半の列島社会における銀の位置付けを勘案すれば、まだそれが可能な段階であったからであるとともに、必ずしも富の独占だけが主目的ではなく、銀供出を求める明の圧力にも対応するため、また大内氏分国とその周辺海域の秩序を維持するためにも、大内氏にとって不可欠な措置であった可能性を想定できる。この時期の石見銀山に関する一次史料がほとんど残されていないことは、大内氏の意図とも無関係ではなかったと推測される。

（４）大内氏最末期の東アジア海域

「後期倭寇」の主力は、中国江南一帯に拠点をもつ密貿易海商たちであったと考えられており、これに倭人（日本列島のみならず、国境をまたぐ境界領域・海域に生きた人々）やポルトガル人などが加わって、国家や民族の枠組みを越える様相を呈していた。〔史料４〕にみられる鄭舜功の認識によれば、嘉靖 13 年（1534）を転機として、中国密貿易海商たちが次々と日本列島を目指すようになり、そのことが「後期倭寇」隆盛のきっかけとなったと記されている。石見銀山における現地製錬の開始が、その背景として軽視できないことは、前述のとおりである。

嘉靖 19 年（1540）、許棟など安徽省徽州出身の許兄弟がポルトガル人と手を結び、同じ安徽省徽州出身の王直も、広東で巨船を造り広域的に商業活動を展開しはじめた。嘉靖 22 年（1543）に許棟が舟山群島の双嶼を本拠とすると、やがて王直も本拠をシャムから双嶼に移し、許棟の配下に属した。明朝は倭寇の禁圧を図り、嘉靖 27 年（1548）、浙江巡撫朱紈が双嶼を襲撃して許棟を捕縛したが、「倭寇」の活動範囲はむしろ中国東南沿岸一帯において一層拡大し、嘉靖 30 年（1551）には倭寇の大頭目となった王直が、烈港を新たな拠点とした。嘉靖 32 年（1553）に、明の官軍が烈港を掃討し、王直は逃走して平戸・五島を拠点に活動するようになる。この頃から、王直が浙江総督胡宗憲によって誘殺された嘉靖 36 年（1557）までの間、王直の配下と自称する雑多な諸勢力が中国大陸沿岸部の至る所で掠奪行為を繰り広げ、猛威を振るった（以上は、『籌海図編』『日本一鑑』による）。「嘉靖の大倭寇」と称される、「後期倭寇」の最盛期である。

「嘉靖の大倭寇」に至る「後期倭寇」の活発化は、東アジア海域の秩序を突き崩し、そのことは、旧来の外交秩序（冊封体制や朝鮮通交）や日本の朝廷権威を重要な拠り所として、16 世紀前半に西日本全域にもおよぶ大きな影響力を持つに至った大内氏の基盤を、次第に損なう要因ともなっていった。それは、都の有職故実や外交儀礼に熟達した公家・文化人・禅僧たちに支えられ、大内文化を生み出した大内氏の特異で独自な立場が、失われていく局面に入ったことを意味している。大内義隆を自害に追い込んだ天文 20 年（1551）の陶隆房の挙兵は、そうした旧来の秩序の担い手たちを排除することにより、大内氏の存立基盤を建てなおすためのクーデターであり、大内義隆と対立した大内氏重臣たちの強い危機感をよく示す出来事であったと言える。しかし、上記のような特異で独自な立場を支えていた人々が殺害・追放されたことにより、大内氏の影響力はむしろ一層の後退を余儀なくされ、大内氏の衰退を食い止めることはできなかった。16 世紀前半に至るまでの大内氏が築き上げた権力体としての姿や影響力を、別の手法によって継承することは、きわめて困難であったことをうかがわせている。それは、避けることのできない時代の流れでもあったと言わなければならない。

三島覚書によれば、陶隆房の挙兵によって大内義隆が自害すると、石見銀山の大工「正重」も切腹させられたという。このことも、大内義隆が石見銀山を直接支配していたことを、裏づけている。以後は、陶隆房（晴賢）の偏諱を受けた「房宗」

という人物によって、銀山大工の地位が継承されたという。

しかし天文 23 年、安芸国毛利氏が大内氏と敵対（「防芸引分」）すると、状況はさらに大きく変化していく。大内氏は、尼子氏や吉見氏と和談して毛利氏に対抗しようとしたが、弘治元年（1555）に陶晴賢が厳島合戦に敗れて自害すると、やがて石見銀山の山吹城衆も毛利方へ転じていく。その時期は、弘治元年末から翌年前半のいずれかの時期である。ここに大内氏による石見銀山支配は、終焉の時を迎えた。大内氏が毛利氏によって滅ぼされたのは、弘治 3 年 4 月のことである。大内氏は、「嘉靖の大倭寇」の猛威が吹き荒れるさなかに滅亡しているのである。

「嘉靖の大倭寇」は、大内氏が拠り所としてきた旧来の外交秩序（明の冊封体制・海禁政策）が、崩壊の時代を迎えたことを示している。大内氏は、石見産銀が生み出した海域の変動によって影響力の大きな後退を余儀なくされたのであり、石見銀山の発展と大内氏の急激な衰退・滅亡との関連性を、否定することはできないと考えられる。

おわりに

石見銀山の発見と開発は、最末期の大内氏の興亡と密接不可分であったと考えられる。

すでに 14 世紀から大陸との交流があり、15 世紀後半以降、遣明船派遣に携わってきた大内氏は、明朝における通貨政策の転換（国家的支払手段たる基軸通貨が銅銭から銀へ転換）と銀の欠乏により、大陸に銀を渇望する数多の諸勢力が存在することを熟知していたと考えられる。享禄年間（1528～1532）以降の大内氏が、北部九州のより確実な掌握に専心し、少弐氏・大友氏との戦争を辞さなかったのは、新たに開発された石見銀山からの輸送経路を確保し、銀の生産・流通の独占的な管理・統制を図ったためでもあると推測される。また、東アジア海域における「後期倭寇」の顕在化は、天文 2 年（1533）の石見銀山における現地製錬の開始と日本銀の流出が、大きな誘因となった可能性が高い。その過程において、大内氏勢力下の博多商人や平戸松浦氏の果たした役割もきわめて大きく、大内氏の積極的な企図が介在した可能性も十分に想定される。

大内氏による日本銀の管理・統制は、初期の石見銀山や日本銀の流通を大きく規定したが、それは大内氏自身の特異で独自な存立基盤を守り発展させていくために不可欠と判断したからであると推測される。しかし、石見産銀が東アジア海域にもたらした影響はきわめて大きく、やがて大内氏固有の存立基盤を揺るがし、大内氏衰退・滅亡を促す要因にもなっていったと考えられる。

大内氏の滅亡は、石見銀山と博多を同時に支配する権力が消滅し、大内義隆の目指したような日本銀の管理はその条件自体が失われたことを意味している。大内氏の衰退と滅亡は、遠隔地からの無数の船を、山陰海岸に引き寄せる重要な契機となったものと思われる[42]。

1550 年代を境として、石見・出雲の海岸には、多数の遠隔地の船が着岸する現象が顕著に見られはじめた。島根半島西端の宇龍浦や杵築浦には、従来ほとんど来航実績のない「北国舟（北東日本海海域の船）」が次々と現れ、「唐船（中国ジャンク）」も山陰海岸に着岸しはじめた[43]。浜田や温泉津では、薩摩半島周辺の多数の船衆・町衆の滞在がほとんど常態化していった[44]。嘉靖 40 年（1561）の鄭若曾『日本図纂』に「石見」は「銀と銅を出す」と記され、1563 年のラザロ・ルイス「東アジア図」には山陰西部に「as minas da prata（銀山）」と書かれているように、中国の日本研究書やポルトガルの航海図にも、石見銀山の存在は明記されるようになっていく[45]。16 世紀後半は、世界全体に流通する銀の量が飛躍的に増加し、日本列島各地はもとより、明の密貿易海商・ムスリム・西欧人など、遠隔地の人々が、次々と直接山陰海岸を目ざし、列島内部においても貨幣としての銀需要が生まれた時代であったと言える[46]。

そして、そのことを重要な契機として、石見銀

山居住者の人口は急速に増加したものと推測され、16 世紀後半には大勢の仮寓者たちが居住する巨大な都市が現れた[47]。それは、単に銀の採掘・製錬・取引のためだけではなく、生産・流通・生活のすべてに関連するあらゆる需要が加速的に拡大していった結果と推測される。石見銀山の争奪を焦点とする激しい戦争が引き起こされ、石見銀山の確保が地域権力の存立に死活的な意味を持つ時代となったのは、都市としての石見銀山がおよぼす影響力が急速に拡大したことにより、新たに出現した中心的都市の掌握が地域の領域的支配に不可欠な段階となったことを示しているのではないだろうか。

石見銀山の「銀の力」は、海域の物流・交流に多彩で多元的な活況をもたらしただけでなく、西日本における戦国動乱に統一政権へ向けた流れを創り出し[48]、やがて世界全体を巻き込む大きな時代の転換を生み出したと言える。

註

(1)　大田市教育委員会『中世大田・石見銀山関係史料集』（2019 年）を一覧するだけでも、16 世紀前半の石見銀山に直接関係する史料がほとんど残されていないことがよくわかる。

(2)　小葉田淳「石見銀山　―江戸時代初期にいたる―」（『史林』18-1、1933 年）。のちに同著『日本鉱山史の研究』（岩波書店、1968 年）所収。

(3)　田中圭一・原田洋一郎「石見銀山をめぐる人々」（石見銀山歴史文献調査団編『石見銀山関係論集』島根県教育委員会、2002 年）において、「尼子氏が大陸貿易に関与したこと、中国地方山間部の鉄生産地帯や銅山をその勢力下に収めていたことをあわせ考えれば、石見銀山の開発に尼子氏の進出が与えた影響を、再評価する必要があると思われる。」と指摘されているが、同時代史料からうかがえる 1520 年代の尼子氏の動向をふまえると、当時の尼子氏の実像が過大に評価されているのではないかと思われる。1520 年代の尼子氏の特徴や実態については、長谷川博史「尼子経久論」（岸田裕之編『毛利元就と』中国新聞社、2007 年）、同「十六世紀の日本列島と出雲尼子氏」（島根県古代文化センター『尼子氏の特質と興亡に関わる比較研究』2013 年）、同「尼子氏からみた大内氏」（大内氏歴史文化研究会編『大内氏の世界をさぐる』勉誠出版、2019 年）などを参照していただきたい。また、銀山大工吉田氏の本拠が出雲国能義郡であると推定されているが、それを裏づける史料は未見である。

尼子氏の役割を重視しようとする議論の背景には、大永 4 年（1524）の尼子氏が、石見国東部三郡（安濃郡・邇摩郡・邑智郡）を支配していたという前提理解が、大きな影響を与えていると考えられる。しかし、石見国東部三郡などにおける尼子氏の臨時棟別銭賦課権を記した大永 4 年（1524）4 月 19 日御崎社修造勧進簿（「日御碕神社文書」『大社町史　史料編』1060）が、尼子氏の支配の実態を示すものでないことは、長谷川博史『戦国大名尼子氏の研究』（吉川弘文館、2000 年）の p.86、p95 註（９）、p.211 註（４）において述べたとおりである。

(4)　デニス・フリン／秋田茂・西村雄志編『グローバル化と銀』（山川出版社、2010 年）、岸本美緒編『歴史の転換期 6　1571 年　銀の大流通と国家統合』（山川出版社、2019 年）。

(5)　大内氏の専論ではないが、佐伯徳哉「石見銀の東アジア流出をめぐる戦国期西国地域権力・社会」（石見銀山歴史文献調査団編『石見銀山関係論集』島根県教育委員会、2002 年）は、大内氏の分国支配や地域経済の構造や支配のなかに産銀輸出の問題を位置付けようと試みた論文である。既存の政治・社会構造と石見銀山の開発や産銀流通がどのように関連しているのかという問いは、史料的制約が一層厳しいものの、引き続き検討が必要な課題であると考えられる。

(6)　小林准士「解説―『銀山旧記』の成立事情」（『石

見銀山史料解題　銀山旧記』島根県教育庁文化財課世界遺産登録推進室、2003 年）。

(7)　村上直・田中圭一・江面龍雄共編『江戸幕府石見銀山史料』（雄山閣、1978 年）、前掲註（6）小林准士氏編著書。

(8)　『新修島根県史 史料篇３ 近世（下）』（島根県、1965 年）、原慶三「尼子氏の石見国進出をめぐって」（『山陰史談』29、2000 年）、前掲註（6）小林准士氏編著書。

(9)　前掲註（6）小林准士氏編著書では、これら２つの写本について、「歴史的事実の記述として、どちらに信用をおけるかと言えば、『銀山之初』の方である場合が多い。『おべに』の方に、年号と干支の記述に齟齬が多く見られることからもそれは言えるが、具体的な事件の記述に関しても間違いが多いのである」と指摘している。

(10)　前掲註（6）小林准士氏編著書では、これらの２点の写本を「（ハ）系統」と分類している。秋田洋一郎「一六世紀石見銀山の灰吹法伝達者慶寿禅門　―日朝通交の人的ネットワークに関する一試論―」（『ヒストリア』207、2007 年）では、これに「石見銀山要集」所収の「銀山始り縁起」（小林准士氏の整理では（へ）系統）を加えた３点を、一括してとらえている。ただし、この（へ）系統が（ハ）系統よりもかなり後に成立したであろうことは、容易に推定できる。

(11)　「石州仁万郡佐摩村銀山之初」には筆者の名が記されていないので、三島覚書という略称はあくまでも仮称にすぎない。かつて、文禄 5 年の年紀と三島与左衛門の名が書かれた覚書（原本）が存在した可能性があり、「石州仁万郡佐摩村銀山之初」や「おべに孫右衛門ゑんき」がそれと密接に関連する写本であると想定されるので、便宜的にこの略称を用いるものである。

(12)　同時代の情報から転写を重ねて成立した「高野山浄心院往古旦家過去帳姓名録」（上野家文書）にも、「天文十年」の「吉田大蔵丞」、「天文十三年」の「山神ノヲベニ子孫　吉田孫左衛門シウトメ」、「天文十四年」の「吉田孫左衛門」などの名を確認することができる。また、「天文十年」の「マサシケナリ」は大工正重を指す可能性もある。長谷川博史「毛利氏支配下における石見銀山の居住者たち」（池享・遠藤ゆり子編『産金村落と奥州の地域社会』岩田書院、2012 年）表 1 に拠る。

(13)　前掲註（6）小林准士氏編著書 4 頁に言及され、その後、小林准士「安原備中関連棟札解説」（島根県教育委員会『石見銀山歴史文献調査報告書Ⅲ　安原備中関連史料集』2007 年）31 頁においてやや詳しく論証されている。

(14)　学習院東洋文化研究所『李朝実録　第廿二冊（中宗十八―二十四年）』中宗実録 第二（笠井出版、1959 年）。

(15)　前掲註（2）小葉田淳氏論文。

(16)　大田市教育委員会『中世大田・石見銀山関係史料集』（2019 年）所収。

(17)　前掲註（3）所引田中圭一氏・原田洋一郎氏論文では、現地調査をふまえて、『田儀村誌』（1961 年）や「田儀桜井家文書」所収文書を検討し、三島清右衛門とその一族は、田儀周辺地域の鉱業事情に精通していたと推測している。

(18)　前掲註（10）秋田洋一郎氏論文、佐伯弘次「博多商人神屋寿禎の実像」（九州史学研究会『境界からみた内と外』岩田書院、2008 年）。

なお、人名の「左衛門」「右衛門」の違いは、文字の判別が困難であったり、当時においてもしばしば誤記・混用されるなど、定めがたいものではあるが、以下のようなことを指摘できる。

「銀山庄主」として現れる人物名については、「石州仁万郡佐摩村銀山之初」は「小田藤右衛門」、「おべに孫右衛門ゑんき」は「小田藤左衛門」と翻刻されてきている。

一方、天文 16 年度遣明船一号船船頭の人物名については、柳井郷直が寧波滞在中に記した「大明譜」（天龍寺妙智院所蔵）に拠るものであるが、小葉田淳氏は両様に解読され、牧田諦亮氏は「小田の藤左衛門尉」、岡本真氏・須田牧子氏は「小田ノ藤右衛門尉」と翻刻されている。ちなみに、

遣明船正使の策彦周良自身は、「小田藤衛門」と記している。以上は、小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』(刀江書院、1969 年、初版 1941 年)、牧田諦亮『策彦入明記の研究　上』(宝蔵館、1955 年)、岡本真・須田牧子「天龍寺妙智院所蔵『大明譜』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』30、2020 年)に拠る。

(19)　木村晟他編『日本一鑑の總合的研究　本文篇』(棱伽林、1996 年)。

(20)　袁茂萍「ある明代の知識人と日本認識　―鄭舜功と『日本一鑑』」(上田信・中島楽章編『アジアの海を渡る人々』春風社、2021 年)。

(21)　陳侃撰『四部叢刊續編 278　使琉球録　夷語夷字附』(臺灣商務印書館、1966 年)。

(22)　田中健夫『東アジア通交圏と国際認識』(吉川弘文館、1997 年)。

(23)　学習院東洋文化研究所『李朝実録　第廿四冊(中宗三十三―三十九年、仁宗)』中宗実録 第五・仁宗実録(笠井出版、1960 年)。

(24)　学習院東洋文化研究所『李朝実録　第廿四冊(中宗三十三―三十九年、仁宗)』中宗実録 第五・仁宗実録(笠井出版、1960 年)。

(25)　橋本雄・米谷均「倭寇論のゆくえ」(桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店、2008 年)。

(26)　高橋公明「一六世紀中期の荒唐船と朝鮮の対応」(田中健夫編『前近代の日本と東アジア』吉川弘文館、1995 年)。

(27)　学習院東洋文化研究所『李朝実録　第廿四冊(中宗三十三―三十九年、仁宗)』中宗実録 第五・仁宗実録(笠井出版、1960 年)。

(28)　学習院東洋文化研究所『李朝実録　第廿五冊(明宗即位年―九年)』明宗実録 第一(笠井出版、1960 年)。

(29)　創作をまじえた物語ではあるが、ポルトガル人メンデス・ピントによる叙述も大変興味深く、よく知られている(メンデス・ピント著／岡村多希子訳『東洋遍歴記１～３』東洋文庫、1979～1980 年)。『東洋遍歴記』には、東アジア海域において、ポルトガル商人・ムスリム商人・中国密貿易海商らによる日本銀の争奪を繰り広げたことや、平戸からシンシェウ(漳州)へ大量の銀が運ばれていたことなどが描かれているが、それらはメンデス・ピント自身が同じ海域で活動した 1540 年代前後の状況を反映した記述と思われる。

(30)　関周一「東シナ海と倭寇」(木村茂光・湯浅治久編『生活と文化の歴史学 10　旅と移動―人流と物流の諸相』竹林舎、2018 年)。

(31)　本多博之「戦国豊臣期の政治経済構造と東アジア」(『史学研究』277、2012 年)。

(32)　長谷川博史『列島の戦国史３　大内氏の興亡と西日本社会』(吉川弘文館、2020 年)。

(33)　佐伯弘次「大内氏の博多支配機構」(『史淵』122、1985 年)。

(34)　秋山伸隆「戦国大名毛利氏の石見銀山支配」(岸田裕之編『中国地域と対外関係』山川出版社、2003 年)。慶長 13 年(1608)5 月佐世宗孚書案(毛利家文庫 22 諸臣 32)に拠る。

(35)　米原正義『戦国武士と文芸の研究』(桜楓社、1976 年)。

(36)　『大日本古文書　家わけ第五　相良家文書之一』395 号。

(37)　熊本中世史研究会編『八代日記』(青潮社、1980 年)。

(38)　『大日本古文書　家わけ第五　相良家文書之一』417 号。ただし、宮原からの銀の産出は以後の史料に全く見られず、原田史教「天文年間における相良氏の銀山開発の実相について」(『日本歴史』519、1991 年)は、洞雲による鑑定結果自体を疑問視している。

(39)　大庭康時「戦国期石見銀山の港と街道　―古龍と街道―」(島根県教育委員会・大田市教育委員会『石見銀山　石見銀座遺跡テーマ別調査研究報告書』2、2017 年)。

(40)　東京大学史料編纂所蔵「島津家久上京日記」(「中書家久公御上京日記」〈九州史料刊行会編『近世初頭九州紀行記集』1967 年〉)によれば、伊勢参詣から帰国途上の薩摩国島津家久は、天正 3 年(1575)7 月 10 日申刻(15～17 時)に石見国

浜田を出船し、強風に苦しめられた波任せの航行でありながら、7 月 12 日巳刻の末（11 時前）に平戸に着船している。この間、どこにも寄港していない。条件にもよると思われるが、古龍・鞆ヶ浦から平戸への銀の直送は、当時において十分可能であったと思われる。

(41)　鳥谷芳雄「尼子氏時代の銀貨幣資料」（大田市教育委員会『石見銀山学ことはじめⅥ』報光社、2022 年）は、日本銀行金融研究所貨幣博物館所蔵の石州銀が、昭和 17 年（1942）に島根県仁多郡の岩屋寺から発掘されたものであることを明らかにし、その形状の特徴や、据えられた花押が尼子氏のものである可能性などを根拠として、天文年間の岩屋寺復興に関連した地鎮具（もしくは報賽品）である可能性を、指摘したものである。

　あるいは尼子氏が天文 9 年（1540）に石見銀山で入手したものであるのかもしれないが、厳密には伝来の経緯や使用目的を確認できず、花押の主の特定も容易ではない（丁銀上部の花押は尼子経久・晴久の花押との近似性を示しているが、同じ形は未見である）。いずれにせよ、このような残り方自体が高額な秤量貨幣とは趣きを異にしており、鳥谷氏も指摘されたように、16 世紀前半の日本列島内部における石州銀の位置付けを知るうえで貴重な示準資料と思われる。今後の検討を待ちたい。

(42)　陶晴賢が主導した大内義長時代の大内氏による石見銀山支配に関する史料は限られているが、天文 21 年（1552）10 月に、大内氏と敵対していた尼子晴久が、出雲国杵築商人坪内宗五郎に対し「石州銀山屋敷」5 ヶ所の権益を保証している（「坪内家文書」『大社町史　史料編』1263）ことは、尼子氏側の主張ではあるものの、注目される。この時期の大内氏による支配がすでに後退しはじめていたことを示すというとらえ方も可能であるし、大内義隆が目指したと思われる銀生産・流通の管理政策を大きく転換した結果であるとも考えられる。すでに 1540 年代後半には、中国ジャンク船の西日本各地への来航事例も累積され、フランシスコ・ザビエルが堺に銀が集積されていると述べたような状況（角山栄『堺―海の都市文明』PHP 新書、2000 年）となっており、大内義隆による日本銀の管理・統制の手法は、維持することの難しいものとなりつつあったのではないかと思われる。遠隔地からの船が石見海岸に直接来航するような石見銀山への人々の流れに門戸を開いたのは、押しとどめがたい銀の流れの増大によると考えられるが、同時に大内義長・陶晴賢時代の銀山支配にも由来している可能性を排除できない。

(43)　永禄年間（1558～1570）の尼子氏発給文書（「日御碕神社文書」『大社町史史料編』1436・1447・1448・1449・1450・1502・1690）や、同時期の毛利氏発給文書（「譜録 福井十郎兵衛信之」38 号・55 号）による。「譜録 福井十郎兵衛信之」は、長谷川博史「毛利元就の山陰支配　―生田就光と福井景吉―」（『島根史学会会報』50、2013 年）に紹介した。

(44)　天正 3 年（1575）6 月 24 日、石見銀山に宿泊した薩摩国の島津家久は、翌日から温泉津と浜田に滞在し、7 月 10 日に出船するまでの間、連日にわたり、入れ替わり立ち替わり薩摩半島各地の多数の人々（加治木衆、秋目衆、伊集院衆、入来、喜入舟の衆、白羽衆、太平寺、東郷舟衆、鹿児島町衆、京泊衆など）からの饗応を受けている（前掲註（40）「島津家久上京日記」）。また、文禄 3 年（1594）3 月に石見国海岸部を東進した薩摩国の廻国聖堀之内日限坊は、浜田において「さつま衆」に会ったことを記している（栗林文夫「『廻国通道日記』について」『黎明館調査研究報告』26、2014 年）。

(45)　京都大学文学部国語学国文学研究室編『日本寄語の研究』（京都大学国文学会、1965 年）、長谷川博史「日本地図から見た十六世紀の「中国地域」」（岸田裕之編『中国地域と対外関係』山川出版社、2003 年）。

(46)　前掲註（32）長谷川著書については、鹿毛敏夫氏に書評の労をお執りいただいた（鹿毛敏夫「書評　長谷川博史『大内氏の興亡と西日本社会』」『芸

備地方史研究』318、2021年）が、そのなかで「海域史研究の近年の研究動向では、十六世紀における社会変革の画期を、一貫して一五七〇年前後に求める共時性を有しており、著者が第一・第二四半期間に画期の存在を認めようとする東アジア海域に対する認識とは、乖離を認めざるを得ない。」という指摘をされている点は、筆者の意図を十分伝えることができなかったことを示しており、本稿の論旨にも関わっているので、一言付記させていただきたい。

本稿においても述べたように、16世紀前半と16世紀後半の銀をめぐる様相は、全く異なっている。無数の遠隔地の船が直接山陰海岸に来航し、石見銀山に仮寓者たちが集住する巨大な都市が現れ、さらには列島各地に銀鉱山が次々と簇生した16世紀後半の状況は、16世紀前半とは別世界とも言えるような全く異なる次元の状況であり、とりわけ1570年代以降の世界的な銀流通の規模が16世紀前半とは比べものにならないことは、議論の大前提と言わなければならない。

しかし、そのような大きな変動が生み出されていく前提や起点として、石見銀山における現地製錬の開始との密接な因果関係が推定される1530年代からの日本列島西部を巻き込む東アジア海域の変化は、それもまた軽視しえないものと考えられる。1520年代までとは異なり、1530年代以降において「後期倭寇」の活動が日本近海との結びつきを格段に深めて具体的な姿を顕わしはじめ、東アジア海域の状況が大きく変化したことは、否定することのできない事実ではないかと考えている。

(47)　長谷川博史「戦国期の地域権力と石見銀山」（『世界遺産 石見銀山遺跡の調査研究』4、2014年）。

(48)　前掲註（32）長谷川著書。